

The Possessions of Kyoto-Fu Gagakko (Kyoto Prefectural School of Painting)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹, Matsuo, Yoshiki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000529

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



京都府画学校の校有品

松尾 芳樹

明治13年に開校した京都府画学校は、四条派、円山派、文人画から西洋画に至るまで幅広い絵画教育を行った。この学校は明治22年に京都市に移管されるが、この時作成された校有品記録により、当時の学校で使用された教材の概要を知ることができる。失われたものは多いが、現在も学校に遺された一部の資料は、教則のみではわからない教育の実態を伝えている。目録や遺された書籍、絵手本を見ると、今日の学校同様に様々な教材が教育を支えていたことがわかるが、専攻により教材の収集方針や使用方法は異なった。文人画や西洋画の教育では、書籍の役割が重視されたが、伝統的門流を継承する北宗、東宗では絵手本中心の教育になったと考えられる。

主要項目：京都府画学校 蔵書目録 絵手本 教科書 絵画教育

The Possessions of Kyoto-Fu Gagakkô (Kyoto Prefectural School of Painting)

By Matsuo Yoshiki

Kyoto-Fu Gagakkô (Kyoto Prefectural School of Painting) founded in 1880 did painting education in the various categories such as Shijo school, Maruyama school, Literati painting, Western-style painting. That school was transferred to Kyoto City in 1889, and we can know the outline of the teaching materials used at that school by the records made at this time. The most part of that materials was lost at present. But, the few materials remained at school tell us the reality of the education which it doesn't know only to read the regulations. When we see those records, books and copy books, it is understood that various teaching materials supported education in the same way as present school. The collection policy of the teaching materials and the way of using these were different for every department. The teachers took the use of books into consideration in the education of the literati painting and the western-style painting. On the other hand, the teachers taught mainly by using copy books in the departments of Hokushu and Toshu which succeeded to the tradition of the Japanese painting .

Key Term : Kyoto-Fu Gagakkô (Kyoto Prefectural School of Painting) , Library catalogue, Practice book of paintings, Textbook, Painting education

1. はじめに

京都府画学校は明治13年に京都御苑内に開校した。日本絵画の専門教育を行う日本最初の公立学校として、夙に知られている。しかし、その開校の意義については未だ不明な点が多い。先に画学校の教員と教則について考察したが⁽¹⁾、明治初期の混沌とした美術界の状況を反映して、決して見通しの良いものではない。

近世以後、日本絵画の教授が諸派の家塾あるいは画塾で行われてきたことは、言を俟たない。その教育活動を近代的教育組織である公立学校という場で試みたのが京都府画学校である。絵画の専門教育を、異なる師系の画家が教則に従って共同教授する組織として構想し、その実現を模索した点は、近代化の道程として評価されてよい。しかし、門流の異なる画家が共同して指導にあたるためには、教育の水準を定め、教程を分担する必要がある。工房から近代制度としての学校へ教育を移転するためには、教員も生徒も相応の変化を自得しなげなければならない。

京都府画学校を考察するために使用できる資料は、決して多くない。それだけに、京都市立美術工芸学校略年表編集用の資料である「京都市立美術工芸学校沿革材料」（以下「沿革材料」）と、京都府画学校の教員出仕に関わる「画学校出仕人名簿」「創立以来旧職員履歴書綴」の記録は、貴重である⁽²⁾。これに加えて、画学校で使用された書籍や絵手本をはじめとする教育資料もまた、教則のみでは知ることのできない教育の実際を、我々に語りかけるものとして注目すべき対象となる。

こうした断片的な資料を整理再編することは、画学校研究の基礎的作業として避けられない。本稿では、画学校で用いられた教育資料について現時点の知見を整理し、画学校の絵画教育において果たした役割を考察するものである。

2. 画学校の所有品

明治22年12月に府から市へ学校が移管されるに際し、学校の所有品について現況を確認した文書の控えが、「沿革材料」の中にある。

画学校之有品取調

一 画幅	三十五点
一 画範	三十三点
一 諸器械	八十五点
一 書籍	九十点
一 褒状類	十点
計	二百五十三点

この記録により、京都市移管直前の京都府画学校には、253点の校有品があったことがわかる。旧准后里御殿から織殿、元勸業場と移転を繰り返す京都府画学校が所有していたものは、実にこの253点の物品でしかなかった。これを多いと見るか、少ないと見るかは、視点により異なるものとなる。明治13年7月の開校から9年が経過しており、東宗、西宗、南宗、北宗の四

つの専攻からなる四宗画学校は、すでに東洋画と西洋画を対置する二専攻へと整理統合されていた⁽³⁾。移転と改組によって落ち着く暇もない学校にとって、備品の充実と管理が、困難事であったことは想像に難くない。

「沿革材料」にみる項目と点数のみの記述からでは、どのようなものを所蔵していたのか、推測することすら難しいが、幸いこれら校有品の内容を現在に伝える資料として大学に「明治廿一年十二月末調査控現在校有品調査控」（以下「校有品調査」）という簿冊が残されている。これは、先にも触れたように、京都市政の施行にともない、京都府画学校が京都市に移管されることになったために、移管対象となる物品を調査した記録である。調査は移管の一年前に行われているが、簿冊には調査報告書のような整えられた体裁はなく、調書を集めて紙縋で綴じただけの冊子である。この記録が、校有品中の教育資料に関わる部分に考察を加えることを可能にさせた。「校有品調査」の全文は末尾に掲げておく。

「校有品調査」には、「沿革材料」に掲げられた“書籍”“画幅”“褒賞”“画範”の区分に対応して、現有品の名称と員数が記されている。当初は25紙からなっていたとするが、その構成は不明であり、現在は“諸器械”に対応する部分等が失われ、総紙数も13紙にすぎない。加えて、この記録は「沿革材料」に記される点数が、実際には複数点からなるものを含む件数であることを示している。1件1点の項目はあるが、1件が複数点により構成される例は多く、以下全てを件数として扱う。

まず“画幅”の部は、「沿革材料」の記録35件に対し、「校有品調査」には34件が目録化されている。明治21年10月24日に田能村直入から寄附されたばかりの書画類25件に、9件の絵画資料を加えたものである。直入からの寄贈絵画は全て現存し、その他の資料も9件中4件が今も遺されている。“画範”とは、絵手本のことで、「沿革材料」の記録33件に対し「校有品調査」には40件の品目が挙げられる。“書籍”は「沿革材料」90件に対し、「校有品調査」では96件の書目があり、“褒状類”10件については、「校有品調査」に9件が挙げられる。また、「校有品調査」では失われている“諸器械”部については、直入寄贈品のうち茶器文房具類が京都市美術工芸学校期の備品台帳⁽⁴⁾に記入されているところから、目録の一部を補充することができる。

「校有品調査」の目録は京都市移管に一年先行するものではあるが、「廿二年十一月調／校有品取調事件」とする表紙が1件綴りに添えられているため、明治22年の移管直前まで、「校有品調査」の記録は利用されていた。「沿革材料」の数と比較して、最終的な調整に至る痕跡が遺されていることや、“書籍”に明治22年に刊行された書物が含まれていることから⁽⁵⁾、目録は移管直前まで修訂されたものである。従って、明治22年12月時点の京都府画学校所蔵品の状況は、この目録にきわめて近似するものと考えている。

「校有品調査」のこのような概要から、“諸器械”の一部こそ不明ではあるが、当時の校有品総数の3/4程度は、把握することが可能である。画学校そのものは明治24年の京都市美術学校改称まで継続するのだが、明治27年に京都市美術工芸学校に改称するまで、校有品の管理には混乱が生じており、その間の増減を時系列的に把握することは困難である。その理由として、この時期には西洋画科が廃止され、図案専攻が設置されるなどの大きな組織改編があったことや、管理の曖昧さから「書籍台帳」など記録類の情報に不明な点が多いことが挙げられる。学

校の校有品が本格的に管理されるようになるのは、京都市美術工芸学校の時代以後といつてよい。画学校時代は備品管理の面では黎明期である。

画学校校有品の多くは失われてしまったが、わずかながら残されているものがある。「校有品調査」の存在が、画学校で使用された教材を具体的に理解する手掛かりとなり、その残存状況を確認できることは幸運といわなければならない。近世はおろか、近代初頭の画塾においてさえ、絵画の専門教育の現場を伝える記録は稀少である。具体的な所蔵品目録は、当時の教場を、限られた情報の中から想起させる貴重な資料である。

画塾から学校へと、絵画教育の基盤を移転しようとした当時の画家たちの思考を、校舍、教員、規則、教材、生徒などといった切り口から理解しようとするとき、具体的校有品は様々な示唆を与えてくれる。実際、これらの資料は、これまで度々紹介される機会のあった絵手本のみならず、いま少し幅広く画学校における教材の概念を提示しているのである。

3. 画学校の書籍目録

「校有品調査」の”書籍”の部は、明治前期の絵画の専門教育の中で書物がどのような役割を果たしていたのかを伝える資料である。その当時刊行され、流布していた書物の内、何を以て学校の教材に充てたのか、単に刊行書目にあたるだけでは分からない情報といえる。今日の学校に図書館を欠くことができないように、明治期の画学校においても書籍は教材として利用された。画学校時代の蔵書の管理については、台帳が遺されていないため、どのような方法で整理運用していたのか不明⁽⁶⁾だが、京都市移管後数年を経た京都市美術工芸学校時代の明治29年改「書籍目録」⁽⁷⁾が遺されているので、これを手掛かりに蔵書構成を読み解いてみたい。

この明治29年改「書籍目録」の収録起点は明治27年末頃におかれたと見られ、先行する目録などを転記したことが推測される。現存する美術工芸学校の図書目録としては最も古いものと思われる。内容は、分類別記載となっており、以下の22項目により、蔵書が整理されている。

1 考古学	2 画譜	3 画論	4 図案
5 工芸	6 史伝	7 史学	8 修身
9 有職故実	10 印譜	11 数学用器画	12 漢文
13 書法	14 物語	15 和文	16 絵巻物
17 予備科 ⁽⁸⁾	18 体操	19 博物	20 仏書
21 地理	22 雑書		

学校は明治27年に国から補助金を受けるようになり、この補助金によって多くの書籍や参考資料を購入するようになる。補助金の性格から、その的確な管理が求められたことは想像に難くない。それまで曖昧だった受け入れ日や価額の記入が以後確実に行われているので、これ以前に受け入れた書籍備品をある程度選別することができる。画学校期の蔵書の受け入れ時期について、明確なものはきわめて少なく、この明治29年改「書籍目録」においても曖昧なままである。

先に述べたとおり、「校有品調査」が行われたのち、京都市に移管される明治22年12月ま

での間に、校有品目録の修正が行われたと考えられるため、「校有品調査」の内容は、概ね京都府画学校蔵書の概要と見てさしつかえない。もとより、予算の不十分な学校であったから、参考図書を明確な方針のもと体系的に購入するのは困難であったことが推測される。蔵書構成には、結果として偏向が生じても仕方のない状況はあったが、その偏向にも理由は存在したはずである。

「校有品調査」に見られる96件の書目のうち、重複記載されていると考えられる2件⁽⁹⁾を除く94件が京都府画学校の蔵書と考えられる。このうち59件は明治29年改「書籍目録」にも記載されており、これらが上記の区分に従って分類されている。この分類方針に倣って他の図書も分類し、94件全体の書目を一覧にしたのが表1である。このうち、ミセケシにされた5件を割愛すると、「沿革材料」に示された点数に近似することになるため、両者の点数の違いは、選択の結果であることわかる。『絵画雑誌書』『絵画出品目録』『学校規則書』については、あらたに作られた『雑誌諸規則書類』に一括資料化されて点数に繰り込まれた可能性が高いが、その内容については不明である。明治29年改「書籍目録」には『絵画叢誌』『国華』の名が見られ、「校有品調査」が実施された当時すでに刊行が開始していた『絵画叢誌』はこの『絵画雑誌書』の中に含まれていた可能性があるだろう⁽¹⁰⁾。

先に述べたとおり、「校有品調査」に記録された画学校蔵書のうち明治29年改「書籍目録」の整理までに35件が廃棄もしくは紛失している。さらに「校有品調査」には後筆で「ナシ」と朱筆されたものが35件あり、その中には明治29年改「書籍目録」に記載されているものが3件含まれているから、明治27年以後も廃棄紛失などは進んだ。実際には、この時期新たに購入される図書も増加するので、蔵書数そのものが減少していくわけではないが、校舎の移転、組織の改変、カリキュラム改訂などが重なるなかで、蔵書の更新が、かなりの速度で行われたことを教えてくれる。学校教育の変化が、そのまま書籍の更新に影響を与えているという結果は、書籍が教育に大きな役割を果たしていた状況をうかがわせる。

明治29年改「書籍目録」記載の59件から、明治34年に改称する京都市立美術工芸学校期の「図書台帳」⁽¹¹⁾では4件が失われており、明治40年8月には破損または不用の理由でさらに15件の書目が廃棄された⁽¹²⁾。従って明治22年に94件あった書目は、明治40年には40件ほどに減少したことになる。この中で現在も同大学附属図書館に所蔵が確認されるものは36件なので、画学校期の蔵書に限定すれば、明治時代末期には現状に近い所蔵状況になっていたことがわかる。

当時の蔵書には、画学校の所蔵印が捺されている。絵手本に見られるのと同じ「京都画学校」の朱文方印あるいは「画学校」の朱文円印である。ただ、最末期に収蔵されたものでは、所蔵印を欠く場合があったらしく「京都市美術学校」朱文方印を捺したものがある。また、同大学芸術資料館には、画学校の墨書のある書籍⁽¹³⁾が残っており、図書室のない時代、こうした書籍に図書を管理し、利用に供していたと考えられる。

4. 画譜と画論

画学校蔵書全体の構成の中では、“画譜”が最も多く28件にのぼり、内容は西洋画関係10件、東洋画関係18件となっている。西洋画関係の画譜は『西画指南』を除き、全て明治29年ころまでには紛失または除却されており、西宗または明治22年廃止の西洋画専攻で行われた西洋画教育に関わるものと思われる。残念ながら、『鉛筆画本洋綴』『上等画學本』『造化図画本』のように書目のみでは書物を鑑定できないものがあるが、全体として西洋画教育の教科書が集められたと理解できる⁽¹⁴⁾。ただ、その内容は初学者を対象とした水準と見るべきであり、普通教育における図画教育の流れに従ったものでしかない。特に意識して揃えられている『小學普通画學本』と『西画指南』はその典型的な選択といえる。「コース氏 画学洋書」とあるのは、当時の西洋画譜の引用書のひとつであった『New Drawing Cards for Schools』のような Benjamin Hutchins Coe (1799-1833) の絵手本⁽¹⁵⁾と見られるため、輸入書の蓄蔵もあったことがうかがえるが、初学者のものであることに違いはない。当時の状況として西洋画を学ぶ生徒に、初心者が多かったことは推測できるので、主としてこうした書籍をその教材に充てたと考えられる。

さらに“数学用器画”に分類される13件は、図法とその習熟に必要な算数幾何の教科書で、同じく西洋画科で使用されたと考えられる。これらも明治29年までに半数は除却されており、明治40年には現存する『訂正幾何教科書 壺』を遺して他も廃棄された。これは“画譜”同様、西洋画専攻の廃止に関連する動きとして理解される。

一方、同じ画譜類であっても、日本中国の絵画に関わる東洋画関係の画譜は18件を数え、大半はそのまま現存している。これは、日本絵画の教育が開校以来その中核に行われたことから当然の結果といえよう。画譜類で除却されているのは、明治21年頃からはじまった毛筆画教育に関わる『小学毛筆画帖』『小学毛筆掛図』の2件のみ⁽¹⁶⁾で、他の画譜類の大部分は中国絵画あるいは日本の文人画に関わるものである。特に近世以来、和刻本によって日本の画家にも親しまれた中国画譜である『八種画譜（ただし梅竹蘭菊四譜のみ）』『十竹斎画譜』『芥子園画伝』の三書は、画学校においても架蔵された。また、画譜には『御製耕織図』『晚笑堂竹荘画傳』『歴代名媛図説』『分類二十四孝図』のように人物が主題となったものを比較的多く備えており、カリキュラムの中では、比重が小さく見える人物表現に対しても、注意が払われていたことをうかがわせる⁽¹⁷⁾。

『芥子園画伝』は総体に画譜だが、初編をみれば画論書としての性格もあるため、“画論”に分類されている。この“画論”に分類される10件のうち9件は東洋画関係のものであり、やはり、その大半は現存している。画学校開設を建白した田能村直入は清代の画家沈宋騫に私淑しており、その画論である『芥舟学画編』を備えていることは、その肝煎りと考えてよいだろう。他に『巾箱小品』によって、唐岱の『絵事発微』に触れることもできたから、画学校の東洋画論の中核は、清代の画論を通して育まれたに違いない。『巾箱小品』には揚州八怪の一人である鄭燮（鄭板橋）(1693-1765)の画記も含まれ、同じ著者の『板橋詩集』も蔵書に含まれていることから、中国清代の文人に対する興味の反映がうかがえる。また、『芥子園画伝』については、訳本を南宗教員であった池田雲樵が筆写したものが遺されており、雲樵の授業において

『芥子園画伝』が採り上げられていたことをうかがわせる。実際に雲樵が作成した南宗の絵手本にはこうした画譜を参考にしたものがあるため、明確な教育目的を示唆する蔵書といえる。明治29年改「書籍目録」で“画論”に分類されている清の蒋宝龄『墨林今話』は、本来“史伝”に分類されるべきもので、直入とほぼ同世代の文人である清の秦祖永（1825-1884）『桐陰論画』の架蔵とともに、清代の学芸研究の学習が、一定の厚みの中で行われた可能性を教えてくれる。興味深いのは、神道家である柴田花守（1809-1890）の『画学南北弁』が刊本と写本で備えられている点である。書画については必ずしも専門家といいがたい著者であるが、それだけにわかりやすい画論として受け入れられた可能性がある。幕末期の京都の文人には長崎での遊学を行う者多く、豊前の人柴田花守もまた長崎に学んだ人物である。近世以来の文人画家のネットワークから、こうした書物の活用機会が生まれたのであろう。

“史伝”に分類されるのは、和漢の画人伝である。中国清代の書画人のものとして『国朝画徵録 正統』『墨林今話』を揃え、和書である『清書画人名統録』を補っている。日本の画人のものとしては『扶桑畫人傳』を備えるのみだが、『倭錦』『画人略年表』によって歴史的理解の参考に供している。当時の学校でも今日言うところの美術史的な内容が教授されていたことを推測させる。また、“考古学”に挙げるところも、同様に美術史的な教育で利用されたと考えられる。後に増加する“有職故実”に分類される図書は、現状の目録には見られないが、実際には明治22年6月に幸野棟嶺の所蔵品を模造した「烏帽子式」が録外品としてあげられなければならない。

授業との関わりでいえば、南宗において書や詩文の授業がカリキュラムに入っており、『康熙字典』『鄭板橋集』『山田公雪冤碑』『赤壁賦法帖』がその参考資料とされたことがわかる。『山田公雪冤碑』『赤壁賦法帖』は貫名菘翁（1778-1863）⁽¹⁸⁾の法帖であるが、画学校出仕の中には谷口講山・浅井柳塘・村田香谷など菘翁門の南画家が少なくないことと無関係ではないだろう。文人画教育の中では詩や書は習画とともに重要な要素と考えられ、南宗教則にもそうした要素が採り入れられているが、実際に生徒の学力教養がどの程度こうした授業に応えたものかは不明である。ただ、明治15年2月15日草場船山（1819-1887）⁽¹⁹⁾が評点を行う第1回詩文会を画学校が開催するなど、学校の外部を巻き込んだ企画などもあって、開校当初の学校では教養分野も活況を呈していた。

このように、画学校の蔵書は、西洋画関係のものと、南画関係のものが中核をなしており、四宗画学校でいえば、西宗と南宗においてこれらを補助教材としたことが考えられる。例えば“博物”に分類される、洋書の衛生書のほか、植物、動物、解剖、物理についての和書などは、西洋画教育との関わりの中で教養書としての役割を位置づけることが重要だろう。その他、蔵書の中には修身や作文、地理歴史といった教養に資するものが少なからずあり、画学校には普通教育を補足する役割も担わされていたことが分かる。現実の画学校の教則からは、あまり教養面への展開をうかがうことができないのだが、当時の画学校にこうした性格があったことは留意してよい。中でも、参考書までも架蔵する体育の授業が、明治16年から行われたことは興味深く、これもカリキュラムからはわからない教育の実態を示すものといえる。

北宗の副教員を担当した幸野棟嶺は、画学校開校当初から応用画に対する関心を示していた

が、この分野に関する蔵書は極めて少ない。画学校の最末期に、応用画の専攻が生まれたこともあり、ようやく意匠集である『奈留美加多』が架蔵されたにすぎない。画学校では未だ図案分野は認識が希薄であった。

5. 絵手本と備品類

「校有品調査」に見る”画幅”の大部分は明治20年10月の田能村直入寄付画である。現在も大学に遺されている画幅25件が全て記載されている。残る10件のうち、現在所蔵が確認されているのは池田雲樵『山水図』、田中苔石『紡績工場図』、田中訥言模『加茂祭草紙』、『茶屋船交趾渡航貿易絵巻』の4点である。残る5点は画幅、卷子と異なる形状であるが、ここに分類されている。直接の教材としなかった参考資料をここに充てたらしく、形状や内容からすると”画範”との区別は曖昧である。雨森菊太郎(1858-1920)が寄附したという「東京職工学校線法」は東京職工学校(東京工業大学の前身)の図法見本であろう⁽²⁰⁾。小山三造と正田敬蔵の寄附とみられる「レットル」は、現存品が確認できず不明だが、欧州あたりからもたらされた版画によるラベル類と考えるのが妥当であろう。幸野楳嶺が寄附した「佛都大博覧會図」は、1889年に開催されたパリ万国博覧会の会場図と考えられる。この博覧会では、楳嶺の友人であり画学校の出仕でもあった久保田米僊が金賞を受けているので、本図の入手経路も推測される。

一方、直接の教材となった”画範”は、33件があげられているが、その名称だけで内容を把握することは難しい。現在所蔵が確認できる資料はいくつかあるが、現存する資料との対応が不明確なもの、また現存が今のところ確認できないものがかなり多い。当時の教則の内容と資料名から、東洋画関係の資料と西洋画関係の資料に振り分けたのが表2である。東西南北の四宗画学校から、東洋画と西洋画に専攻が再編された後であるため、東洋画の絵手本や臨模本の未整理が目立つ。またサンプル的ではあるが、意外に西洋画関係の参考資料が集められていたことがわかる。

東洋画関係の画範には、北宗、南宗、東宗の絵手本、画帖が含まれる。東宗のものは望月玉泉がそのまま改組後の画学科教員を務めたためか、画学科期の絵手本と混合しているものと思われる。「運筆画学手本」とされているものは、「明治29年粉本目録」⁽²¹⁾で他の画題別絵手本と別に目録作成されている白描手本をさすものとするのが妥当であろう。また模本の中にもわずかに現存品がある。「宮内省納画」は明治15年頃に画学校の教員及び出仕による揮毫により製作された画帖⁽²²⁾を模写した控えである。「鶴ノ巻」は画学科の生徒による模本で、数少ない現存品である。「模本参考画」は古画古物の写生模写類で、「水鳥画」「小児画」「草花生巻」「円山応挙花鳥写」もこの同類と考えると理解しやすい。現存するものとして表3にあげるものがある。「応用画参考模本」は、その名称から生まれたばかりの応用画学科で使用される参考品であったと考えるのが妥当とおもわれるが、現存品は確認できない。録外品目に「博物館蔵版應用画模本」というのがあることを考慮すれば、「応用画参考模本」も工芸品などの図版であった可能性がある。

西洋画関係の画範は、大半が失われてしまった。イギリス経由で輸入されたドイツの着色石版画《CORPUS CHRISTI DAY》が1枚かろうじて遺されており、当時の雰囲気伝えてる。

また、参考になる資料が少ない時代だったから、新聞の挿絵や写真なども利用された様子がわかる。「田村画帖」は田村宗立による手本画と推測されるが、肉筆というよりは明治20年に刊行した田村宗立による同名の教科書を解体したものである可能性がある。その意味では輪郭模本や書籍中の画譜類に近いものであろう。レガメー(1844-1907)『楨村正直像』⁽²³⁾は、現在額装にされているが、当時はまくりのままであったため、絵手本の一部に含まれていた。これは素描を所有していた元京都府知事楨村が学校へ寄附したもので、本来教材というものはなじまないものであるが、西洋の画家による肉筆画ということで手本と見られたと考えている。

この目録からは、生徒製作品が遺されていたこともわかる。生徒の試験作品のうち、油画は西宗あるいは西洋画、唐紙は東宗あるいは東洋画の各専攻によるものであろう。特に『生徒納画絹本 山水花鳥』5点が遺されている点は興味深い。これは、生徒の卒業に際して自費で上局及び学校に作品を納入するという、四宗画学校時代明治18年6月制定の「卒業生製画心得」⁽²⁴⁾に定められた制度によって学校に遺されたものと考えられる。絹本ということなので東宗のものと考えられよう。現存していれば、卒業作品に準ずる作品の最古例の資料となっていたはずである。

「画手本ノ部」の末尾には、「沿革資料」の数から除外された品目が7点、あげられている。このうち『レットル石版画』『加茂行幸ノ図』は“画幅”にあげられた資料と重複した可能性が高く、“画幅”に分類するか“画範”に分類するか躊躇したものであろう。実際“画幅”中の掛幅装以外の資料は“画範”にあっても不思議ではない。他の5点は録外とされているが、東洋画関係の『十六羅漢寫 第五位一位』『古畫臨模山水花鳥』『東宗寫生画』、西洋画関係の『模様罫畫』をみれば、むしろ追補として記入されたもので、実際には校有品として継承されたと考えてよいものである。

田能村直入の寄付品には、古書画のみならず茶器文房具類が含まれた。“画幅”と同様に“諸器械”にも、直入の寄付品が含まれていたと考えるのが自然である。これは、美術工芸学校時代の「備品台帳」に直入寄附品34件が記録されていることから裏付けられる⁽²⁵⁾。“諸器械”の目録は失われているが、これらが収録されていたと考えれば、「沿革資料」記載の85件のうち、その4割は把握できることになる。

直入寄附品以外の道具類については、他の備品台帳類にも確認できるものがない。しかし、現存する書箱、長持は、画学校の諸器械の範疇にあったと考えるべきだろう。また、西宗における石膏像などの使用について、記録は遺されておらず、その使用を裏付けることができない。“諸器械”の中に教材が含まれていた可能性を否定できないまま、不明とするほかない。

“褒状類”は、〈1〉明治15年奈良博覧会での二等賞、〈2〉明治16年奈良博覧会での二等賞、〈3〉明治17年アムステルダム万国博覧会の金牌、〈4〉明治18年ロンドン万国衛生博覧会二等銅牌、〈5〉京都美術会名誉記念牌の五つの受賞にちなむものである。残念ながら、これらの賞状賞牌は現存を確認できない。この五つの受賞のうち〈3〉〈4〉については、「沿革材料」に記録が残る。〈3〉については「明治十六年中記事」に「此年 和蘭「アムステルダム」博覧会へ本校生徒成績品を出品し金牌を受く」、また「明治十七年中記事」に「同(10月)十八日 府廳より和蘭国アムステルダム府萬國博覽會金牌を送り来る。客年本校より出品せし繪画に體

對する賞なり、其の褒状左の如し。右ハ一八八三年アムステルダム殖民地殖産百年期萬國博覽會金牌及褒状 右京都畫學校に授與す」とある。また〈4〉については「明治十八年中記事」に「七月十一日 本校出品に對し英國倫敦衛生博覽會より二等銅牌を受く」とある。他は記録がなく、誰がどのような功績を受けたのか不明である。明治15年第8次奈良博覽會、明治16年第9次奈良博覽會は、官民合同で設立された奈良博覽會社によって明治8年に第1回が開催された古物、製品、産品の博覽會で、明治23年まで15回開催された。明治20年京都美術會褒状というのは、新古美術會が明治20年の天皇京都行幸の際に開催した博覽會に関わるものである。『京都博覽會沿革史』⁽²⁶⁾によれば、明治20年の天皇皇后行啓にあたり、新古美術會が中心となって、御苑内博覽會場で2月1日から博覽會を開催した。京都府画學校もかなり積極的な協力をしており、西宗は油画、鉛筆画、灰筆画、擦筆画などを出品、京都府画學校の教員出仕による御前揮毫も行われた⁽²⁷⁾。3月8日には京都博覽會社が新古美術會の榮譽を記念して記念碑記念状の授与を行っており、このとき授与されたものが〈5〉と思われる。

6. おわりに

四宗画學校から始まった京都府画學校の校有品を見ると、今日の學校同様に様々な資料が教育を支えていたことがわかる。

直接の教材である絵手本については、東宗、南宗、北宗とも相当な点数を揃えている。参考となる絵画器物を模写写生した粉本類も少なからず備えていたが、その比率からすればかなり絵手本が重視されたことが確認できる。そして東宗、北宗に比べて南宗には、多くの書籍を教育の参考とする特徴が見られ、画譜、画論、詩文、書法の教授に書籍が利用されたと考えられる。

こうした教材の構成から、各宗の教育方針の違いをうかがうことができる。近世における四条派、円山派と、文人画における画系継承の過程に違いがあることは、漠然と理解されているが、その差異を明確に示唆する例は少ない。教材の中に、近世以来続く絵画教授の慣習を、近代に継承する姿を見ることが可能であろう。進取の取り組みの中に織り込まれたある意味保守的な姿勢は、功罪とりまぜて画學校の教育の基本的な性質といえる。

また、西宗の授業においては、書籍や図版を使用した教授が行われていたことが推測され、明治前期の西洋画教育の主流だった模写による教育を踏襲していた状況がうかがわれる。当時の画學校の西洋画教育においては初歩的な段階の生徒が相当数いたことを示すものと見ることができよう。西宗の教員だった小山三造も田村宗立も正田敬蔵も基本的には、工部美術學校で行われていたような、模写から写生へと展開する絵画教育を受けた者である。その意味で、日本絵画の教授を行う傍らで西洋絵画の教授を行う画學校西宗の教育は、画期的ではあったが決して進歩的ではなかった。比較して活発に収集された書籍も、五月雨式に集められた写真や印刷物からなる手本画も、西宗の教育の源流がどこにあったのかをうかがわせるものといえる。画學校末期には、西宗は非常に人気があったと伝えられるが⁽²⁸⁾、その理由が幾何や用器画の教育に端的に表れる実学的要素にあったことは、書籍の架蔵状況からも理解しやすい。

四宗画學校の卒業生は東宗に13人、西宗に13人である。生徒の卒業状況を見れば、この両宗の教育には一定の成果がうかがえる。教則が教育と順調に噛み合いながら展開した成果とい

ってよい。南宗においては、卒業年限を9年とする変則的な方針を採ったことが卒業生不在の理由である。3年を越す学年の生徒がいたことも推測されるため、教則が空回りしてしまった感はあるものの、先の二宗に比較して教育そのものに問題があったとは言い難い。その意味では北宗を除く三宗の教育は成果を担保していた。教則からうかがうことのできる教育の構想と、教材に反映する実践のありさまは、時に矛盾をはらむこともある。教則と教材に向けた考察は、明治前期の流動的な要素の多い絵画教育の実際を浮かび上がらせてくれる。

《注》

- (1) 拙稿「画学校出仕について」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第18号。平成21年3月。京都市立芸術大学芸術資料館編。同館発行)、拙稿「京都府画学校の教育」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第19号。平成22年3月。京都市立芸術大学芸術資料館編。同館発行)
- (2) これら3点の資料はともに原本の所在が不明。京都市立芸術大学芸術資料館に電子複写のみが残る。各資料の概略については注1前掲論文に述べている。
- (3) 明治21年2月14日京都府画学校の校則を改訂し、四宗を改め、普通画学科・専門画学科・応用画学科を置いた。そして3月1日には東京南宗北宗を東洋画にまとめ、西宗から移行した西洋画と対置させて各科の専攻とした。
- (4) 芸術資料館に所蔵。表紙に「備品臺帳／美術工藝學校」とあるのみだが、目録は明治27年末頃から大正末期ころまで使用されたと思われる。
- (5) 『尾形流百図』は明治22年8月に出版されたが、発行されたのは3年後である。目録作成の直前に購入された記録と矛盾するが、当時の出版事情に由来するものであろう。現存品は明治25年6月の発行本であり、京都市美術学校印が捺されているため、何らかの理由で差し替えられたと考えられる。
- (6) 『百年史』(昭和56年3月。京都市立芸術大学百年史編纂委員会編。京都市立芸術大学発行)によれば「1 京都府画学校規則」によって「書籍器械ノ出納ヲ監スル事」は学校の事務責任者である幹事(監事)の業務とされた。「15 画学校事務章程・事務取扱条例」には、府の学務課または画学校掛が取り扱う事務として「書籍器械ヲ保存シ及目録を製スル事」をあげている。明治19年「27 文書保管内規」によれば校務帳簿のうちに「校有品原簿」をあげている。規則上は、監事が責任者となって目録を作成した書器を管理することになっていたらしい。また、明治16年「京都府画学校書器及標本貸付規則」に見るごとく、書籍も含む絵手本などの教材を生徒へ有償貸与した可能性があるが、実態は不明である。
- (7) 京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵。表紙に「明治二十九年三月改／書籍目録／京都市美術工藝學校」とある。明治30年まで使用された。京都市美術工藝学校ではこの他、明治29年改「書籍目録」を継承する「舊書籍目録」「書籍目録」「書籍原簿」の三冊の図書台帳が作られ、分類には若干の増減が加えられており、書籍の管理に試行錯誤する様子がうかがえる。
- (8) 予備科は、明治27年6月26日「京都市美術学校規則」により設置された科。5年の修業年限の本科とは別に1年間の初歩的教育を行うために作られた。8月8日に京都市美術工藝学校へと改称するため、実際には美術工藝学校に設置されたものである。予備科は本科より若い生徒が入学できたが、製図や幾何などを学ぶ実学的要素があった。明治29年改「書籍目録」分類中の予備科には高等小学校レベルの教科書を中心とした書目があげられている。
- (9) 『算術教科書：中等教育』と『新撰理科書』が重複して表記されたのちミセケシされている。
- (10) 明治29年改「書籍目録」によれば『絵画叢誌』は20号から収蔵していたらしいので、調査時点では収蔵が開始していた可能性がある。
- (11) 明治29年改「書籍目録」を継承する京都市美術工藝学校期の図書台帳を経て、明治34年に京都市立美術工藝学校へと改称後作成された図書台帳。「図書台帳」と「分類目録」各3冊がある。分類方法は10門36類に大きく改められ、書籍に加え、教材や粉本を統合したのが特徴である。
- (12) 京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵される「明治四十年四月以降／物品廃棄簿／図書之部／京都市立美術工藝學校」による。
- (13) 木製(95.5×75.5×45.0cm)。表に「畫學校」の墨書がある。後に粉本整理に使用されたが、大きき体裁は和書の書籍である。
- (14) 明治初期の美術教育及び教科書については金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』(平成4年2月

29日。中央公論美術出版)による。

- (15) 金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』(前掲注11書)187-189頁。
- (16) 『小学毛筆画帖』が刊行した明治21年10月に著者巨勢小石は画学校を依願免職した。同年12月からは小学校での毛筆画採用を受けて、小学校教員対象の毛筆画伝習会が画学校で開催されている。学校外の影響もあってこうした普通教育用の画譜が備えられたらしいが、早く失われるのもこうした経緯が関わるのであろう。
- (17) 人物画が上級の課題であったことは東南北各宗教則や、上村松園の述懐(『青眉抄』)からわかる。ただ、遺された絵手本に人物画の数は少なく、画譜や粉本がそれを補ったものと考えられる。
- (18) 阿波の人。本姓は吉井。名は苞。別号は海屋など。大坂懐徳堂中井竹山らに学び京都に私塾を開いた。書画に優れ、書は空海の筆跡や晋・唐の碑法帖に学び独自の書風を樹立した。画は狩野派の叔父矢野典博に学ぶが南宗画に転じ、長崎にも遊歴した。また画論にも明るかった。弟子には多くの南画家がいる。
- (19) 肥前の儒者草場佩川の子で、名は廉。江戸で古賀何庵・篠崎小竹に学ぶ。帰郷後は邑校東原庫舎で教え、一時京都にも出るも帰国。対馬厳原藩に招致され、伊万里に啓蒙塾を開いた。本願寺に招かれ明治9年から京都に入った。詩文・書画をよくし「日本史略伝」などの著作がある。
- (20) 明治14年に創立した東京職工学校は工業教育を行うことを目的とし、図学や幾何の授業もあった。明治17年に同校教師となったドイツ人ワグネルは、明治11-14年京都の舎密局に教諭として招聘されており、京都に人脈があった。京都の名士であった雨森もその一人であった可能性がある。『東京工業大学百年史 通史』(昭和60年5月。東京工業大学編・発行)27-101頁。
- (21) 京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵。明治29年11月に書籍や参考品とは別に管理されていた粉本の現状を確認するためにとりまとめられた目録。明確な区別はされていないが、画学校期のものが含まれている。
- (22) 宮内庁三の丸尚蔵館蔵「京都府画学校校員画帖」の抄出模本である。明治15年8月17日出仕となった森春岳までが揮毫している。本画帖が皇室に献上された経緯は不詳。原本の研究に齊藤全人「館蔵「京都府画学校校員画帖」について」(『三の丸尚蔵館年報・紀要』第12号。平成19年3月。宮内庁三の丸尚蔵館編。宮内庁発行)がある。
- (23) 日本を訪れていたエミールギメに同行したフェリックスレガメーによる素描。明治9年に二人が京都府知事榎村正直を訪れた際にその場でレガメーが速写し、榎村に贈られた。京都府画学校開校後の明治14年に榎村から学校に寄附され、明治36年川島甚兵衛から寄附された金欄により現在の額装となった。
- (24) 『百年史』(前掲注5書)140頁。
- (25) 「備品台帳」に記録される直入寄付品は以下の34件で、これに「校有品調査」の「画幅」25件を加えたものが、直入寄付品の全体である。「校有品調査」の朱書注記によれば、画幅の大半は学校にはなく、京都府勧業課の土蔵内に、長持に入れられて保管されたい。画幅の内容をはじめとする直入寄付資料の現状については、京都市立芸術大学芸術資料館のホームページ(<http://w3.kcua.ac.jp/muse/>)の「収藏品検索」で確認することができる。

区分	品目	量数(個)	原価(円)	(筆者注記)
陶磁器	青磁 鉢	1	5	現存
	朱泥 水指	1	3	現存
	涼爐 臺付	1	5	現存
	青蕎麦 壺 小	1	3	確認できず
	コボシ	1	1	現存
	茶碗	5	5	現存
	急須	1	3	現存
	急須 亀一作	1	1	現存
	漆器	朱塗臺子	1	8
彫刻	水晶 置物(丑)	1	3	現存
	玉 香爐 臺付	1	10	現存
	直入画九峰刀 茶盆	1	5	現存
	松林岩伊刀 茶盆	1	1	現存
雑	遵式 花瓶 臺共	1	5	現存
	唐石 硯	1	3	現存
	古銅 巾筒	1	0.6	現存
	銀製 匙	1	0.5	現存

墨臺	1	0.2	現存
茶壺 大小	2	0.3	現存
巾筒 象牙	1	3	現存
羽箒	1	0.15	破損除却
灰壓へ	1	0.2	現存
火箸	1	0.15	現存
果物籠	1	0.2	現存
茶合 (木製)	1	0.2	現存
如意 (筒入)	1	2.5	現存
線香筒	1	0.2	現存
短冊篋	1	0.5	現存
炭取籠	1	0.2	現存
箒篋	1	0.8	現存
錫製 茶托	5	2	現存
籤筒	1		現存
香箸筒	1		現存
黄銅 槌目火箸	1		現存

- (26) 『京都博覧会沿革誌』中巻。明治36年12月10日京都博覧協会編集発行。235-249頁。
- (27) 『京都府百年の年表 8 美術工芸編』(昭和45年3月。京都府立総合資料館編。京都府発行)によれば「日出新聞」の記事より、森寛齋、田能村直入、幸野樗嶺、鈴木百年、巨勢小石、望月玉泉、原在泉、鈴木松年、今尾景年、森川曾文、田村宗立、村田香谷、羽倉可亭の13名をあげている。
- (28) 黒田重太郎は『京都洋画の黎明期』(昭和22年1月。京都市編 京都叢書6。高桐書院発行。)92頁(同改訂版67-68頁)の中で「各宗二十名の定員が西宗だけは超過して四、五十名にも及んでいた」と、当時の西宗人気を伝聞として記している。

[附記]

本稿は、2010年度に鹿島美術財団より受けた「美術に関する調査研究の助成」(研究課題「京都府画学校の研究」)の成果の一部である。

表1 京都府画学校蔵書目録

現存	分類	書名	冊数	価額(円)	著編者	発行者(発行地)	発行年	備考
○	01 考古学	考古画譜	4	0.8	古川躬行	(写本)	1865	
○	01 考古学	小笠原流礼式結形雛形図写取記	1	1	三吉保治	(写本:吉田秀毅(京都))	1887.01 写	1887.7 受入
○	02 画譜(西)	西画指南	5	7.5	川上寛	文部省(東京)	1871	
×	02 画譜(西)	画学初歩	2	0.2	平瀬作五郎	山岸彌平(岐阜)	1878	
×	02 画譜(西)	小學普通画學本	48		宮本三平	文部省(東京)	1878	
×	02 画譜(西)	小学臨画帖	1		松井昇	小川義平(滋賀)	1878	
×	02 画譜(西)	画法階梯:小学	8	1.2	前田吉彦	熊谷幸介(神戸)	1878.06	
×	02 画譜(西)	小学図画階梯	13		市橋捨五郎	平沢潤助(福井)	1888.02	
×	02 画譜(西)	(上等画学本)	2	0.4	(鑑定不能)	-	-	
×	02 画譜(西)	(造化図画本)	1	3	(鑑定不能)	-	-	
×	02 画譜(西)	(鉛笔画本洋綴)	1		(鑑定不能)	-	-	
×	02 画譜(西)	(Coe's New Drawing Cards for Schools)	1	7	(米)Coe, Benjamin Hutchins	不明(米国)	?	
○	02 画譜(東)	分類二十四孝図(海徳画譜)	2	0.4	小田海徳	吉田屋治兵衛(京都)ほか	1843	
○	02 画譜(東)	漢画早学 初集	4	1	村上正武	村上正武:文榮堂(大阪)	1880.05	
○	02 画譜(東)	畹香館画賸	4	2.5	瀧和亭	瀧精一(東京)	1884.04	
○	02 画譜(東)	梅嶺百鳥画譜 続編	1	0.5	幸野梅嶺	大藏孫兵衛:錦榮堂(東京)	1884.11	
×	02 画譜(東)	煤嶺画譜	2		幸野煤嶺	笹田彌兵衛, 村上勘兵衛(京都)	1886	
×	02 画譜(東)	小学毛筆画帖	12		巨勢小石	福井源次郎:正宝堂(京都)	1888.1	
○	02 画譜(東)	絵本英雄鑑	5	0.75	長谷川光信	大藏孫兵衛:錦榮堂(東京)	?	
○	02 画譜(東)	武者魁図会	3	0.45	下河辺拾水	大藏孫兵衛:錦榮堂(東京)	?	
○	02 画譜(東)	尾形流百図	2	1.4	中野其明	不明(日本)	1892.06	
×	02 画譜(東)	(小学毛筆掛図)	12		(鑑定不能)	-	-	
○	02 画譜(東)	新鶴梅竹蘭菊四譜	4	3	(明)黄鳳池	不明(日本)	?	
○	02 画譜(東)	十竹齋画譜	16	2.25	(明)胡海陽	不明(日本)	1883	1884.10 受入
○	02 画譜(東)	円通帖	1	0.3	(明)陳賢画・隠元書	不明(日本)	1883.02	1883.12 板原氏より寄付
○	02 画譜(東)	雁山図巻	1	3	編者不詳	不明(日本)	?	
○	02 画譜(東)	歴代名媛図説	2	0.8	(明)汪道昆著/仇英画	申報館申昌書画室(上海)	1879.6	
○	02 画譜(東)	詩画帖	5	2	(明)唐寅	申報館申昌書画室(上海)	1879	
○	02 画譜(東)	御製耕織図	1	2	(清)焦秉貞	不明(中国)	1696 序	
○	02 画譜(東)	晚笑堂竹莊画伝	2	1.15	(清)上官周	不明(中国)	1743 序	
×	03 画論(西)	雜氏美学	2	1.6	(仏)Veron,Eugene 著/中江篤介訳	文部省編纂局(東京)	1883-1884	
○	03 画論(東)	芥子園画伝 初集 2 集 3 集 4 集	23	6.5	(清)王概, 王安節	菱屋孫兵衛:五車楼(京都)	1818	
○	03 画論(東)	訳本芥子園画伝	3	0.5	(清)王概	(写本:池田雲樵(京都))	1880.11 写	
×	03 画論(東)	訳本芥子園画伝	3	0.5	(清)王概	不明(日本)		
○	03 画論(東)	芥舟学画編:頭書標注 卷2	1	0.3	(清)沈宗騫著/田結莊斎治編	佐々木慶助:九如堂(敦賀)	1879.12	

○	03 画論 (東)	桐陰論画	4	1.5	(清) 秦祖永著／寺西養蔵調点	浅井吉兵衛 (大阪)	1880.07	
×	03 画論 (東)	巾箱小品	4	1	(清) 金農、唐岱 ほか	不明 (日本)	?	
○	03 画論 (東)	画学南北弁	2	0.7	柴田花守	島崎源兵衛 (東京)	1882.05	
○	03 画論 (東)	画学南北弁	1		柴田花守	(写本)	1883.05 写	
○	04 図案	奈留美加多	5	1.4	小田切春江	片野東四郎 (名古屋)	1883.07	
×	06 史伝	倭錦	1		住吉広行	住吉広定 (東京)	?	
○	06 史伝	畫人略年表	1	0.05	川崎千虎	川崎千虎 (東京)	1882.11	
○	06 史伝	扶桑畫人傳	5	1.95	古筆了仲	坂昌員 (東京)	1884.07	
○	06 史伝	清書画人名統録	2	1.2	宮崎憲／中邨後, 加藤元純, 山本弘校	柳原喜兵衛 (大阪)	1838 序	
○	06 史伝	国朝画徴録 正統	2	1.44	(清) 張庚著／蔣泰, 湯之昱校	美濃屋文次郎: 静観堂 (名古屋) 等	1797 序	
○	06 史伝	墨林今話	6	3	(清) 蔣宝麟	不明 (中国)	1852 跋	
×	07 史学	十八史畧詳解: 挿画	4	0.4	平木保景	開益堂 (京都)	1882.05	
×	07 史学	国史略字類大全: 頭書挿画	3	0.75	松山喜輔	五車樓 (京都)	1883.03	
×	07 史学	小学日本史	6	1.15	新保盤次	原亮三郎: 金港堂 (東京)	1889.12	
○	08 修身	幼学綱要	7	2	元田永孚	元田永孚 (宮内省蔵版)	1882.12	1884.2.21 京都府庁より寄付
×	08 修身	小学修身書	12	0.875	木戸鱈	原亮三郎: 金港堂 (東京)	1883.01	
×	11 数学用器画	筆算教授本	3	0.48	(米) Davies, Charles 著／山田正一訳	大谷仁兵衛: 津建堂 (下京)	1879	
×	11 数学用器画	数学三千題	4	0.8	尾関正求撰	三浦源助 (岐阜)	1880-1883	
×	11 数学用器画	小学筆算書 答式共	5	0.75	古川門	集英堂 (東京)	1886.07	
×	11 数学用器画	算術教科書: 中等教育	2	2.2	寺尾壽	敬業社 (東京) 柳原新一郎	1888	
×	11 数学用器画	幾何教科書解式	1	0.9	鈴木長利, 飯田與三編／田中矢徳閲	田中矢徳 (東京)	1883.12	
○	11 数学用器画	訂正幾何教科書 巻	1	0.64	田中矢徳編／鈴木長利校／近藤眞琴閲	白井鍊一 (東京)	1887.02	
×	11 数学用器画	突氏幾何学	1	0.3	(英) Todhunter, Isaac / 曾禰達蔵訳／鈴木敬信閲	坂本嘉治馬	1888.09	
×	11 数学用器画	調蒙野画法	1	0.1	(英) Rawle, John S. 著／岡道亮訳	岡道亮 (京都)	1876.09	
×	11 数学用器画	図法一斑	5	0.7	多賀章人	西宮松之助 (東京)	1882.02	
×	11 数学用器画	用器画法	5	1.5	平瀬作五郎	中近堂 (東京)	1882-1883	
×	11 数学用器画	学校用器画法	4	0.63	(伊) Fontanesi, Antonio / 西敬訳	前川源七郎 (大阪)	1883.05	
×	11 数学用器画	透視画法	2	0.1	宮島鎗八	三田印刷所 (東京)	1886.12	
×	11 数学用器画	(疏水工事図面)	1		(鑑定不能)	-	-	
○	12 漢文	康熙字典	40	5.5	(清) 張玉書, 陳延敬 ほか	須原屋茂兵衛 (江戸)	1863	
○	12 漢文	鄭板橋集	4	3.5	(清) 鄭板橋	不明 (中国)	?	
○	13 書法	赤壁賦法帖	2	1.4	貫名海屋	熊谷直次: 鳩居堂 (神戸)	1882.02	
○	13 書法	山田公雪冤碑	1	1.8	貫名海屋	不明 (日本)	?	
×	15 和文	小学読本字引	1	0.08	(同名書複数あり鑑定不能)	-	-	
×	15 和文	小学読本	4		師範学校編	文部省 (東京)	1874.08	
×	15 和文	高等小学読本	8	1.44	池永厚, 西村正三郎著	辻敬之: 普及舎 (東京)	1887.12	
×	15 和文	(作文教授本)	6	0.942	(鑑定不能)	-	-	

×	18 体操	普通体操 隊列運動法	1	0.26	松石安治	原亮三郎：金港堂（東京）	1886.12	
×	18 体操	小学校用兵式体操教練	1	0.4	柳明義	福井源次郎：正宝堂（京都）	1888.11	
×	19 博物	華氏解剖摘要	9	1.3	村上典表	松村九兵衛：文海堂（大阪）	1877.1	
×	19 博物	新撰理科書	8	1.4	高島勝次郎	文学社（東京）	1888.02	
×	19 博物	物理学 完	1		宇田川準一訳	福田仙蔵（東京）	1888.02	
×	19 博物	動物学	1	0.25	竹中定太郎編／佐々木忠二郎関	東京教育社（東京）	1888.1	
×	19 博物	植物学	1	0.25	敬業社	敬業社（東京）	1888.11	
×	19 博物	Lessons in hygiene physiology and stimulants and sedatives	1	0.95	(米) Cutter, John C.	J.B. Lippincott company（米国）	1885	
×	21 地理	日本地誌略	3	0.225	師範学校編	文部省（東京）	1874	
×	21 地理	日本地誌略字引	1	0.08	(同名書複数あり鑑定不能)	-	-	
×	21 地理	万国地誌略	3	0.225	師範学校編	文部省（東京）	1875.07	
×	21 地理	万国地誌略字引	1	0.06	(同名書複数あり鑑定不能)	-	-	
×	21 地理	京都府管内全図	1	0.8	鶴田道生, 細田信道, 山田忠三校正	京都府	1885.02	
×	21 地理	小学地理書	4		森孫一郎・豊岡俊一郎	松村九兵衛（大阪）	1887.05	
×	22 雑書	京都新古美術会品目	4		阿形精一	池田八郎兵衛（京都）	1887.03	
×	22 雑書	(絵画雑誌書)	20		(鑑定不能)	-	-	
×	22 雑書	(絵画出品目録)	10		(鑑定不能)	-	-	
×	22 雑書	(現行類聚規則書)	3	2.4	(鑑定不能)	-	-	
×	22 雑書	(学校規則書)	10		(鑑定不能)	-	-	
×	22 雑書	(学事年報書)	21		(鑑定不能)	-	-	
×	22 雑書	(勤業報告書)	5		(鑑定不能)	-	-	
×	22 雑書	(明治廿年新暦)	1	0.04	(鑑定不能)	-	-	

- 凡例
1. 京都市立芸術大学附属図書館に所蔵が確認されるものは現存に○を付す。
 2. 名称のうち、別称または確定しない名称は（ ）にいった。
 3. 著編者名は判明する限り示した。日本人以外の人名には国名を付した。鑑定不能の場合は発行者名等も割愛した。
 4. 発行者名・発行地は、判明する限り示した。
 5. 発行年は、判明する限り示した。不明な場合序跋の年紀を示す場合がある。
 6. 備考欄は受入情報を示した。

表2 明治21年校有品調査控収録画範目録

《東洋画関係資料》		
《絵手本》		
北宗運筆手本	230 枚	一部現存（画学校絵手本のうち）
南宗運筆手本	708 枚	一部現存（画学校絵手本のうち）
北宗画帖	2 冊	一部現存（画学校絵手本のうち）
運筆画帖	12 冊	一部現存（画学校絵手本のうち）
写生運筆手本	194 枚	一部現存（画学校絵手本のうち）
写生運筆帖	1 冊	確認できず
運筆画学手本	164 枚	一部現存（画学校絵手本のうち）
腕力練習画	40 枚	確認できず
人物骨格法画	40 枚	確認できず

《模本》		
宮内省納画写	46 枚	現存（137780001000：御用見本画写）
鶴ノ巻	1 巻	現存（123780001000：群鶴図巻）
模本参考画	100 枚	一部現存（表3 現存粉本参照）
水鳥画	1 枚	確認できず
小児画	1 枚	確認できず
草花寫生巻	2 巻	確認できず
円山応舉花鳥写	45 枚	確認できず
応用画参考模本	104 枚	確認できず

《西洋画関係資料》		
画学手本	5 枚	確認できず
西洋婦人画	1 枚	確認できず
西洋着色画	11 枚	一部現存（141540001000：CORPUS CHRISTI DAY）
セヒヤ画	1 枚	確認できず
セヒヤ画 コロン版	1 枚	確認できず
輪郭模本	123 枚	確認できず
写真人物	11 枚	確認できず
西洋新聞画	44 枚	確認できず
人物中版写真	18 枚	確認できず
人物小版写真	28 枚	確認できず
西洋写真画 人物	11 枚	確認できず
田村画帖	60 枚	確認できず

《生徒製作品》		
試験生徒製画油画	1 括	確認できず
試験生徒製畫唐紙	1 括	確認できず
生徒納画絹本 山水花鳥	5 枚	確認できず

《作品》		
肖像画	1 枚	現存（101120001000：横村正直像）

表3 現存する画学校期所蔵粉本

作者	名称	技法	形態	員数	年紀	備考
作者不詳	楽器図	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
作者不詳	楽器図	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
榎戸在勤	鐘鼓図	膠彩	まくり	1綴(5紙)	明治22年	画学校印あり
作者不詳	鼓図	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
勝山 某	楽器図	膠彩	まくり	1枚	明治22年	画学校印あり
作者不詳	楽太鼓図	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
作者不詳	琴箏琵琶図	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
作者不詳	琴図	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
二木福次郎	東方朔図	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
沢村太吉	月次風俗図一・二月(呉春)	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
沢村太吉	月次風俗図四五月(呉春)	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
沢村太吉	月次風俗図五六月(呉春)	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
沢村太吉	月次風俗図七八月(呉春)	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
沢村太吉	月次風俗図十一月(呉春)	墨画・一部膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
沢村太吉	月次風俗図八・十二月(呉春)	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
望月玉泉	群仙図(呉春)	墨画	まくり	1枚	明治22年	画学校印あり
森川三次郎	中国故事人物回道士像	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
二木福次郎	狸鼓腹図(幸野樸嶺)	膠彩	まくり	1枚	明治22年	画学校印あり
作者不詳	十六羅漢図第三尊者	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
作者不詳	十六羅漢図第六尊者	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
藤山復雄	野馬図	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
沢村太吉	石榴小禽図	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
二木福次郎	小松髭籠図(呉春)	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
二木福次郎	松寄生図	膠彩	まくり	1枚	明治22年	画学校印あり
作者不詳	秋景山水図(鈴木松年)	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
勝井覚之助	水車山水図(与謝蕪村)	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
上田左馬太郎	掃衣図(呉春)	膠彩	まくり	1枚		画学校印あり
小川勇之輔	唐画竹林図	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
荒木田国男	泊船山水図(呉春)	墨画	まくり	1枚	明治22年	画学校印あり
加藤子直彦	蓬萊山図(呉春)	墨画	まくり	1枚		画学校印あり
国井応文・跡見玉枝	唐鞍馬鹿図	膠彩	まくり	1綴(4紙)	明治14年3月2日	画学校印あり
原在泉	唐絵諸図	膠彩	まくり	1綴(3紙)		画学校印あり
高山弁吉・浜八百彦・上田左馬太郎	群鶴図巻	墨画・部分膠彩	卷子	1巻		校有品調査控による
作者不詳	茶屋船交趾渡航貿易絵巻	墨画・部分膠彩	卷子	1巻		校有品調査控による

【校刊】 明治 21 年現在校有品調査控

※上記資料 13 紙について墨書・朱書・印影を整理した。

朱筆または押紙に示された文字は（ ）内に示した。ただし行頭の
○印は朱印、□は墨印、△は朱筆。墨書による○印は◎で区別した。
ミセケシは取り消し線で示した。

(表紙)

廿二年十一月調
校有品取調事件
畫學校

《表紙裏》

京都府画學校

(第 1 紙)

《押紙》此書類ハ写し濟ナリ」

(朱文円印：吉田秀毅)

明治廿一年十二月末調査控 (朱文方印：深谷)

現在校有品調査

表紙共廿五枚

(第 2 紙)

書籍之部

品目	量數	原價
○學畫編	四冊 帙入	金壹円五拾錢
○芥子園画伝	廿參冊 同	金七円五拾錢
○字典	四拾冊	金五円參拾錢
○詩画舫	五円 帙入	金貳円
○巾箱小品	四冊 同	金壹円
○漢画早学	四冊 同	金壹円
○桐陰論画	四冊 同	金壹円五拾錢
○墨林今話	六冊 同	金參円
○鄭板稿集	四冊 箱入	金參円五拾錢
○雁山図帖	壹冊 箱入	金參円
○海僊画譜	參冊	金七拾錢 (二)
○四友画譜	四冊	金參円

◎図法一斑	五冊 (○壹冊ノミ)	金壹円貳拾銭	(三)
◎用器画法	五冊 (○ナシ)	金壹円五拾銭	(ナシ)
○西画指南	五冊	金七円五拾銭	
○維氏美學	貳冊	金壹円六拾銭	(ナシ)
○幼学綱要	七冊		
△○奈留美加多	五冊	金壹円四拾銭	
○耕香館画譜	四冊 帙入	金貳円五拾銭	
○十八史畧詳解	四冊	金五拾五銭	

(第3紙)

○萬國地誌略	参冊	金貳拾貳銭五厘	(ナシ)
○日本地誌略	参冊	金貳拾貳銭五厘	(ナシ)
○修身書	拾貳冊	金八拾七銭五厘	
○小學讀本	四冊	金拾八冊	(ナシ)
○國史略字類	参冊	金七拾五銭	
○萬國地誌略字引	壹冊	金六銭	(ナシ)
○作文教授本	六冊	金九拾四銭貳厘	(ナシ)
○日本地誌略字引	壹冊	金八銭	(ナシ)
○小學讀本字引	壹冊	金八銭	(ナシ)
◎筆算教授本	参冊 (一の巻一冊白井より返ル)	金四拾八銭	(ナシ)
○画学南北辨	貳冊	金七拾銭	
○画學初歩	貳冊	金貳拾銭	(ナシ)
◎上等画學本	貳冊 (一冊アリ)	金四拾銭	(ナシ)
○画法階梯	八冊	金壹円貳拾銭	(ナシ)
○コース氏 画学洋書	壹冊 (五十一枚)	金七円	(ナシ)
○造化図画本	壹冊	金参円	(ナシ)
○普通小學画學本	四拾八冊		(ナシ)
○円通帖	壹冊		
○十竹斎画譜	拾六冊 (帙入)	貳円貳拾五銭	
○雪冤碑法帖	壹冊	壹円八拾銭	
○歴代名媛図説	貳冊	八拾銭	
○晚笑堂画傳	貳冊	壹円拾五銭	

(第4紙)

○耕伴(織)図	貳(壹)冊 (箱入)	金貳円	
○扶桑畫人傳	五冊 (帙入)	金壹円九拾五銭	
○現行類聚規則書	参冊	金貳円四拾銭	(ナシ)
○貫名前後赤壁法帖	貳冊 帙入	金壹円四拾銭	
○京都府管内全図	壹冊	金八拾銭	

○訳本芥子園畫傳	参冊	金貳拾参冊	(ナシ)
明治廿年新曆	壹冊	金四錢	
○鉛筆画本 洋綴	壹冊	品川弥二郎氏寄贈	(ナシ)
○小笠原流禮式結形写本	壹冊 (藤山かし○)		
二冊 ○幾何教科書 (田中矢徳著)	壹部 (冊)	金六拾四錢 (○同解式…)	
◎○小学算術書答式共 (古川四著)	壹部 (五冊)	金七拾五錢 (答式ノ第三不足)	(ナシ)
○數學三千題	壹部 (四冊)	金八拾錢	(ナシ)
○隊列運動法 (松石著)	壹冊	金貳拾六壹千	
用器画法	四冊	金八拾四錢	
○カウター氏著生理書	壹部 (一冊)	金九拾五錢	
(一冊不足) ○新撰理科書	壹部 (八冊)	金壹円四拾錢	(ナシ)
○ (中等) 算術教科書 寺尾壽編	壹部 (二冊)	金壹 (貳) 円貳拾錢	
○解剖摘要 図付	拾冊 (九冊)	金壹円五拾錢	
○小学図画階梯	拾参冊		(ナシ)
算術教科書 寺尾壽編	壹部	金壹円	
○訓蒙罫画法	壹部 (冊)		
○新古美術會品目	参 (四) 冊		

(第5紙)

○学事年報書	廿壹冊		(ナシ)
○勸業報告書	五冊		(ナシ)
絵画雑誌書	廿冊		(ナシ)
○ (雑誌諸規則書類)	(壹箱)		
同出品目録	拾冊		(ナシ)
○畫人略年表	壹冊 (枚)		
○倭錦	壹冊 (枚)		(ナシ)
不分明 疏水工事図面	壹冊		(ナシ)
○芥子園写本	参冊		
畫學南北辨	壹冊		
○清書人名書	壹 (貳) 冊	金拾錢	
学校規則書	拾冊		
○畫徵録 正統	二冊	金壹円貳拾錢	
○高等小学読本	八冊	壹円四拾四錢	
○絵本英雄鑑	五冊	七拾五錢	
○武者魁図會	三冊	四拾五錢	
○尾形流百図	二冊	壹円四拾錢	
○物理学 宇田川著	壹冊		(ナシ)
○植物學	壹冊	廿五錢	

○動物學	壹冊	廿五錢	
○百鳥画譜 幸野著	二冊		(一冊)
○小学毛筆画帖 巨勢著	十二冊		(ナシ)
○同 掛図	十二冊		(ナシ)

(第 6 紙)

○兵式体操教練	一冊		
○小学地理書 豊岡著	四冊	八拾錢	(ナシ)
○小学日本史 新保著	六冊	壹円拾五錢貳厘	
○透視畫法 宮島著	二冊		(一冊)
○考古畫譜	四冊		
○突氏幾何学 鈴木曾禰著	一冊		
○花鳥画譜 幸野著	二冊		(ナシ)
○新撰理科書	一冊	壹円拾貳錢	
○松井昇臨画本	一冊		(ナシ)

(第 7 紙)

(○印勸業課土藏長持中預リノ分△印本校現在)

畫幅之部

品目	量數	原價
○楊元徳画	壹幅 箱入	金四拾五円
○汪芥亭画	壹幅 同	金百六拾円
○顧岳畫	壹幅 同	金貳拾円
○宗山響畫	壹幅 同	金參拾五円
○方士庶畫	壹幅 同	金四拾五円
○黄尊古畫	壹幅 同	金參拾五円
○楊鯤拳画	壹幅 同	金拾五円
○王雲谷画	壹幅 同	金貳拾五円
○王蓬心画	壹幅	金參拾円
○張月川画	壹幅 箱入	金參拾五円
○王三錫画	壹幅 同	金五円
○紫芝山	壹幅同	金七拾円
○王中立画	壹幅同	金貳拾五円
○觀瀑ノ図 直入臨模	壹幅同	金拾五円
○直入臨畫山水	八幅 一箱入	金百參拾七円五拾錢
○張玉川画	壹幅	金貳拾五円
○井南居士画	壹幅	金六円
○蒋廷錫, 進士官画扇面	壹幅	金拾參円

○直入臨画呂洞賓画	壹幅	金參円
○同上 鍾馗画	壹幅	金參円

(第 8 紙)

○潘義絶書	壹幅 箱入	金四拾円
○毛許軒畫	壹幅同	金參拾円
○書畫合作	壹枚	金參拾貳円五拾錢
○花溪道人画	壹幅	金五拾五円
○上邊画	壹幅	金九円
○△秋景山水 (雲樵)	壹幅	金四拾五錢
○△舟遊画	壹枚	金參拾錢
○△紡績場画	壹幅	金九拾錢
○田中訥言筆加茂祭画	壹卷 箱入	金拾円五拾錢
○交趾画卷	壹卷	
○日蝕觀測図	壹綴	
○東京職工学校線法	壹綴	雨森菊太郎贈遣
○レットル	壹綴	疋田小山贈遣
○佛都大博覽會図	一葉	幸野楳嶺贈遣

(第 9 紙)

褒賞ノ部

品目	量数	受入年月
○奈良博覽會 褒状	壹枚	明治十五年
○二等賞牌	壹箇	同年
○奈良博覽會 褒状	壹枚	同十六年
○二等賞牌	壹箇	同年
○和蘭國アムステル府博覽會賞状	壹枚	同十七年
○同國 金牌	壹箇	同年
○英国倫敦萬國衛生博覽會	壹箇	同十八年
○京都美術會褒状	壹枚	同廿年
○名譽記念牌	壹個	同年

(第 10 紙)

廿一年十一月廿七日 深谷省之助 (朱文方印：深谷)

校長 (朱文円印：吉田秀毅) 司計 (朱文円印：小野澤)

兼而會計課ヨリ本校現在品取調

方照会有之候ニ付別冊調査候

間左案相添へ同課へ送付可致哉

兼而ハ御照會相成候本校現在品

取調書別冊之通ニ候間可然

御取計相成度此段申添候也

年 月 日 校名

第二部会計課

木寺属殿

(第 11 紙)

(朱文門印：吉田秀毅) (朱文門印：不読) (朱文門印：小野澤)

校有品現在物品調書ハ左ノ書式

ニヨリ御調整相成度候尤原

價ノ不分明ノモノハ空罫ニ為申

置可然候右御答有候也

名称 数量 原價

廿一年十二月六日 会計課 (朱文門印：木寺近信) (朱文門印：福家)

画学校御中

(第 12 紙)

画手本ノ部

品目	枚数
<input type="checkbox"/> 西洋婦人画	壹枚
<input type="checkbox"/> 画学手本	五枚
<input type="checkbox"/> セヒヤ画	壹枚
<input type="checkbox"/> 西洋着色画	拾壹枚
<input type="checkbox"/> 同 コロン版	壹枚
<input type="checkbox"/> 輪郭模本	百貳拾參枚
<input type="checkbox"/> 写真人物	拾壹枚
<input type="checkbox"/> 肖像画	壹枚
<input type="checkbox"/> 運筆画帖	拾貳冊
<input type="checkbox"/> 寫生運筆帖	壹冊
<input type="checkbox"/> 同 運筆手本	百九拾四枚
<input type="checkbox"/> 北宗運筆手本	二百參拾枚
<input type="checkbox"/> 南宗運筆手本	七百〇八枚
<input type="checkbox"/> 草花寫生卷	貳卷
<input type="checkbox"/> 腕力練習画	四拾枚
<input type="checkbox"/> 人物骨格法画	四拾枚
<input type="checkbox"/> 模本参考画	百枚
<input type="checkbox"/> 水鳥画	壹枚

□小児画

壹枚

(第 13 紙)

□宮内省納画寫	四拾六枚	
□西洋新聞画	四拾四枚	
□人物中版寫真	拾八枚	
□同 小版	貳拾八枚	
□西洋写真画 人物	拾壹枚	
□田村画帖	六拾枚	
□北宗画帖	貳冊	
□円山応擧花鳥寫	四拾五枚	
□応用画参考模本	百四枚	
□運筆画学手本	百六拾四枚	
□鶴ノ卷	壹卷	
□試檢生徒製画油画	壹括	
□試檢生徒製畫唐紙	壹括	
□生徒納画絹本 山水花鳥	五枚	
十六羅漢寫 第五位一位	貳枚	
古畫臨模山水花鳥	六拾壹枚	
模様罨畫	三拾八枚	
レツテル石版画	拾八枚	
加茂行幸ノ図	寫壹卷	
東宗寫生画	五拾貳枚	
博物館藏版應用画摸本	拾五枚	壹円八十錢

